

『今月の天候と農作業』

通巻第5702号

8月号

令和7年7月31日発行

宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

期間のはじめは、気温がかなり高くなる見込みです。

【予報のポイント】

太平洋高気圧に覆われやすいため、向こう1か月の日照時間は平年並か多いでしょう。

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に、期間のはじめは気温がかなり高くなる見込みです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	40	50
降水量	九州南部	40	30	30
日照時間	九州南部	20	40	40

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。平均気温は、高い確率50%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

<1 週目の予報> 8月2日(土)～ 8月8日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<2 週目の予報> 8月9(土)～ 8月15日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 8月16日(土)～ 8月29日(金)

太平洋高気圧に覆われやすいため、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆普通期水稻

1 水管理と追肥

根を健全に保つため、出穂期直前までは間断かん水を行いましょう。ただし、台風接近時から通過後に風が止むまでは、吹き返しによる品質低下を防止するため深水状態を保ちます。また、高温時には、用水の入れ替えや飽水管理が有効です。

追肥（穂肥）の適期は、ヒノヒカリでは、幼穂の長さが約1cmの時期です。葉色を見て施肥量を判断しましょう。

2 病虫害防除

いもち病は出穂前と穂揃期頃に、紋枯病は出穂前に防除します。

カメムシ類は穂揃期とその7～10日後の2回防除を徹底します。

トビイロウンカ（秋ウンカ）は、基幹防除を基本とし、発生が多い場合には臨機防除を行いましょう。

◆大豆

1 中耕・培土等

雑草対策や発根を促すための中耕・培土を2回実施します。1回目は本葉3葉期に第1節の位置まで、2回目は本葉5葉期に第3節の位置まで培土をします。

2 病虫害防除

ハスモンヨトウの防除は若齢幼虫時が効果的です。網目状の被害葉を見つけたら直ちに防除をします。

◆そば

播種時期は山間地域では8月上中旬、西・北諸県地域では8月下旬、沿海地域では8月下旬～9月上旬です。

播種量は10a当たり条播が6kg、散播は約10kgが目安になります。

（福川 泰陽）

施設野菜

◆施設野菜全般

次作の植え付けに向けて、土壌消毒や施設の修繕、施設周りの環境整備などを行います。特に、施設の破損部から施設内に害虫が侵入して、ウイルス病が蔓延することがあるため、防虫ネットの補修や張り替えなどを行きましょう。

◆露地きゅうり

夏秋きゅうりは生育が早いため、適期収穫や摘葉、整枝を徹底し、草勢が低下しないようにします。

また、べと病や炭疽病などの病害が発生しやすいため、定期的な農薬散布、下葉や垂れ枝の除去など、こまめな管理を行きましょう。

◆夏秋ピーマン

雨よけ栽培では、施設内の温度上昇より尻腐果の発生や草勢の低下が起こりやすくなります。そのため、寒冷紗による遮光や循環扇の利用、妻窓の開閉などを行い、温度管理に注意するとともに、こまめなかん水管理を行きましょう。

また、草姿が徒長しやすいため、こまめに主枝の更新を行いながら、流れ果の発生を抑制して、収量の確保に努めましょう。

◆いちご

苗鉢内の培土が乾燥しやすくなるため、午前中に十分なかん水を行います。また、乾燥に注意しながら、追加のかん水を行うとともに、かん水むらがないように、こまめな管理が必要です。

緩効性肥料等を置肥する場合は、今月の中旬までに施用します。極端な肥料切れは苗質を低下させるため、苗の生育状況に応じて液肥の葉面散布等を行いながら、今月中旬までに切り離しを行い、健苗の確保に努めましょう。

(境田 耕作)

葉茎根菜類・いも類

◆秋冬野菜の土づくり

秋冬野菜の作付けに向けて土づくりを行う時期です。播種や定植の約一ヶ月前までに完熟堆肥や石灰資材を施用しましょう。

◆にんじん

夏まき栽培は、播種時期になります。土壌が乾燥又は過湿の状態では発芽率が低下するため、土壌の水分量が適度な時に播種します。

黒ボク土では、播種の深さは1～2cmが適しています。

また、発芽が揃うまでは地表面の乾き具合を見ながら、かん水をしましょう。

◆かんしょ

4月に植付けたほ場では収穫期となります。生育日数が130日以上になると、いもの形や皮色が悪くなるため、適期に収穫しましょう。

ヨトウムシ類が多発する時期になるため、若齢幼虫のうちに薬剤防除を行います。

また、地際の茎や芋の腐敗、立ち枯れが起きている株は、速やかに抜き取り、ほ場や周辺に残さないようにします。育苗ほ場は気温の高い夏場に耕うんし、残さの分解を促進します。

特に、種芋を採取するほ場では、異常株の抜き取りや病虫害防除を徹底します。

◆さといも

石川早生は収穫が遅れると「水晶芋」が発生し、品質が低下するため、8月中旬までに収穫します。

中生種では土壌が乾燥すると「芽つぶれ症」が発生しやすくなるため、かん水を行います。

また、疫病対策として、排水対策や台風後の防除を徹底します。

(倉永 泰代)

果樹

Ⅰ 常緑果樹

◆温州みかん

今年は表年ですが、生理落果が多く、樹や園地により着果数にばらつきが見られます。Mサイズを目標とした果実横径は、8月10日の時点で50から56mmが理想です。結果量と果実の肥大を確認し、結果量が多く果実の肥大が悪い園地は、さらに仕上げ摘果を行いましょう。

◆完熟きんかん

初期肥大を促すため、かん水は定期的につづり行います。

また、す上がり対策として、遮光資材等を活用し33℃以上の極端な高温を回避しましょう。

大玉果の生産のためには、施肥と摘果が重要です。結果確認後の施肥と、8月下旬からの傷果と一節二果なり果を中心とした粗摘果を開始しましょう。

◆マンゴー

剪定後に発生した枝の緑化が遅れると、花芽形成が不安定になります。収穫終了後は速やかに剪定を行い、葉面散布や新梢の整理、発根促進剤の利用によって、新梢の充実促進を図ります。

既に剪定が終了した早期出荷園では、十分なかん水と葉面散布を行いましょう。

2 落葉果樹

◆ぶどう

収穫終了後の早期落葉は、貯蔵養分の減少とともに、翌年の生育にも影響を及ぼします。病虫害の防除を徹底し、早期落葉を防止しましょう。

◆クリ

今月から収穫が始まります。収穫は毎日行い、特に温度の低い朝の時間帯に収穫することで、病害果や腐敗果を減らしましょう。

3 台風対策

防風ネットの点検や、冠水対策として排水溝の整備を行いましょう。

かんきつ類のかいよう病対策である銅剤の散布は、台風襲来前に行うことで高い効果が期待できます。

(黒木 宏憲)

花き

◆夏秋ギク

強い日射により、成長点付近の葉焼けの発生リスクが高まるため、遮光や換気、葉面散布、かん水等の対策を遅滞なく実施します。

9月出荷作型では、多肥や高温により奇形花が発生しやすくなるため、適正な施肥、遮光や換気等を積極的に行いましょう。

◆秋ギク

作型ごとに、育苗、冷蔵、定植などの作業を計画的に進めてください。

なお、穂の冷蔵時の温度は2～4℃とし、冷蔵期間は開花遅延を防止するために3週間を限度とします。

また、摘心・採穂時にベンジルアミノプリン液剤を適宜茎葉散布し、高温時の穂の安定確保に務めます。

◆ホオズキ

土壌伝染性病害への対策として、出荷終了後に残さの腐熟処理を実施します。なお、腐熟を促すためには、カーバムナトリウム塩液剤や微生物資材の利用が効果的です。

また、次作に実生苗由来の地下茎を利用する場合は、発芽揃いを良くするために、9月下旬までに播種を行いましょう。

◆スイートピー

催芽処理・種子冷蔵の実施時期です。

充実した大きい種子を選び、流水中で吸水処理を行います。また、事前に冷蔵庫の庫内温度が適切であることを確認してください。

ほ場の準備として、定植の数日前から遮光やかん水を行い、ハウス内温度や地温をあらかじめ下げるようにしましょう。

◆デルフィニウム

中山間地は定植時期です。高温による早期抽だい防止のために、ハウス内の換気や遮光を行いましょう。

◆キイチゴ

弱枝や不良枝の整理時期です。樹勢維持のために充実したシュートを3、4本程度

残しながら、数回に分けて作業を実施します。

また、乾燥ストレスを軽減して萌芽を促進するために、必要に応じて通路かん水を行いましょう。

(山塚 裕美)

畜産

◆家畜防疫対策

4月以降、県内では野生イノシシの豚熱（CSF）への感染が複数確認されており、養豚場へのウイルスの拡散が懸念されています。

豚熱に限らず、家畜伝染病から農場を守るため、畜舎内外の消毒や人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策など徹底しましょう。

また、日頃から健康観察をしっかり行い、異常が見られた場合には、速やかに家畜保健衛生所に通報しましょう。

◆家畜・家さん

本格的な暑さを迎え、暑熱ストレスにより家畜や家さんの生産性が低下する時期です。

新鮮で冷たい水、腐敗やカビの発生がない飼料の給与を心がけましょう。

また、畜舎周辺の除草、換気扇や細霧装置の稼働により風通しを良くし、家畜が過ごしやすい環境づくりを行うことも大切です。寒冷紗等の設置、屋根への石灰や断熱塗料の塗布により、畜舎内への直射日光の差し込みや輻射熱を抑えるなど、複数の対策を組み合わせると、より効果が高まります。

さらに、畜舎周辺の環境整備を行うことは、この時期に発生する吸血昆虫（サシバエ、アブ）などの害虫のすみ処（休息場所）を減らすことになるので、発生低減にも繋がります。生産性を維持するため、できるところから対策を進めましょう。

◆飼料作物

飼料用トウモロコシの収穫時期です。良質なサイレージを調整するためには、乳酸菌が働きやすい環境を作ることが重要です。収穫適期である黄熟期での刈り取り、適度な水分量（50％程度）での梱包、梱包時は密封状態にすることを意識しましょう。

また、出来上がったサイレージは、給与するまで密封状態が保たれるよう、適切に保管しましょう。

(長瀬 朋子)

特用作物

◆茶

これからの作業は、来年一番茶の母枝となる秋芽の充実と葉層や芽数の確保を図るためにとても重要です。

1 最終摘採と干ばつ被害の防止

充実した秋芽を確保するための最終摘採時期は、中山間地域では7月中旬、その他の地域では8月上旬が目安です。遅れ芽や徒長枝を除去する際は秋芽を切らないように注意して整枝しましょう。

また、高温・乾燥は、秋芽の生育を抑制します。晴天が続く場合は、7日おきの25～30mmの散水が効果的です。

2 病虫害の防除

チャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマ、ハマキムシ類、炭疽病、もち病、輪斑病等の病虫害が発生しやすくなります。秋芽の萌芽期と二、三葉期頃の2回、殺虫剤と殺菌剤を混用して防除します。網もち病の発生が多い茶園では、四、五葉期にもう1回追加防除を行いましょう。

なお、秋芽の萌芽期に降雨が多く殺菌剤の散布ができなかった場合は、秋芽の三葉期頃に予防剤と治療剤を混用して散布すると安定した防除効果が期待できます。

3 秋肥の施用と土づくり

秋肥は、中山間地域や寒害を受けやすい品種、幼木等では9月上旬までに、それ以外では9月中旬までに、土壌診断の結果を考慮し、地域の施肥基準に準じて施用しましょう。土壌が固く根量が少ない茶園では、9月上旬を目安に堆肥を1～2t施用し深耕します。

加えて、苦土石灰によるpH改善にも取り組みましょう。

また、干ばつ等で樹勢の低下が見られる茶園では、液肥の散布が効果的です。

(新 正仙)

◆しいたけ

しいたけの菌糸は、高温に弱く、夏場の高温により、ほだ木内の温度が35℃以上になると菌が死滅する恐れがあります。また、高温によるほだ木の乾燥は、しいたけ発生量の減少や品質の低下につながります。このため、伏せ込み地では、笠木の補充や遮光ネットを設置し、直射日光による高温障害を防ぎましょう。

また、通風を良くするため、適宜に下草刈りを行います。なお、下草刈りを行う際は、地形や風当たりを考慮し、過乾燥にならないようにしましょう。

夏場に高温乾燥の状態が続く場合は、伏せ込み地での散水が可能であれば、1週間に1回程度、日没以降の時間帯に水分の供給を図ります。ほだ場についても散水施設を活用し同様に水分の供給を図ります。なお、気温が上昇する時間帯に散水すると高温湿潤害菌の被害を受ける可能性があるので注意しましょう。

夏場は、害菌が発生しやすい時期ですので、こまめに巡回し、被害が見受けられた場合は被害木を取り除き、害菌の発生を防ぎましょう。

(奥野 慧)

関連情報

◆農作業安全

今年は、6月以降、猛暑が続いており、全国的に熱中症により医療機関に緊急搬送される方が増加しています。今後も蒸し暑い日が続くことが予想されることから、日中に屋外で作業を行う場合には、単独での作業を避けるとともに、20分おきの水分補給とこまめな休憩を行い、熱中症を予防しましょう。

◆農薬適正使用

6月1日から8月31日までの3ヶ月間、農薬危害防止運動を実施しています。

農薬の使用に当たっては、散布前に必ず農薬ラベルに表示された適用作物、適用病害虫、濃度、量、時期、回数等の使用方法を確認します。

散布時には、河川等の周辺環境、隣接するほ場の作物、周辺住民、家畜等に害を与えないよう周囲への飛散・流出に注意します。

農薬散布後は、必ず散布履歴を記帳するとともに、使用した防除器具を十分に洗浄します。

県内においても、過去に残留農薬基準を超過した事例や、誤った方法で使用した事例が確認されており、十分な注意が必要です。

特に、農薬ラベルの確認不足、隣接ほ場への飛散、散布器具の洗浄不足が原因の事故・違反が多いため、細心の注意を払いましょう。

また、国内において、毎年クロルピクリン剤による事故が発生しています。クロルピクリン剤による土壌消毒を行う際は、必ず保護メガネと防護マスクを着用し、処理後速やかに被覆を行うなど、使用方法を遵守しましょう。

(農業普及技術課)

内容の詳細について

8月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び山村・木材振興課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
普通期水稻	いもち病(葉)	並	葉いもちは、箱施薬剤を施用したほ場であっても、薬剤の効果が切れると発病することがあるため注意します。また、穂いもちは、出穂前に粒剤を施用するか、穂ばらみ後期及び穂揃期に粉剤または液剤による防除を徹底します。 トビイロウンカは、増殖率が高く坪枯れ等の被害が発生するため、ほ場での発生に注意します。 ウンカ類やコブノメイガといった海外飛来性害虫の防除適期については、当センターホームページで随時情報提供しています。
	紋枯病	並	
	トビイロウンカ (秋ウンカ)	並	
	セジロウンカ (夏ウンカ)	やや少	
野菜類等	コブノメイガ	並	アブラムシ類は各種ウイルス病を媒介しますので、早期発見に努め、早めに防除します。 ハスモンヨトウのふ化直後の若齢幼虫は葉裏を集団で加害するため、この時期の発見に努め若齢幼虫のうちに防除を行います。 タバコガ、オオタバコガの発生が多くなっています。ほ場を定期的に見回り、早期発見及び若齢期の防除に努めます。
	アブラムシ類	やや多	
	ハスモンヨトウ	並	
	タバコガ	多	
さといも	オオタバコガ	多	例年、7月下旬以降に発病が急激に拡大するため、薬剤による継続した防除を徹底します。
	疫病	—	
	基腐病	—	
		—	
かんしょ	果樹カメムシ類 (チャバネカメムシ、ツヤアカカメムシ)	—	発病株（つるや塊根）は速やかに抜き取り、ほ場や周辺に残さないようにします。また、発病株を除去したあとは、感染拡大を防止するために登録薬剤による防除を実施します。
		—	
		—	
		—	
果樹全般	果樹カメムシ類	—	県内5か所に設置した予察灯への誘殺数は、平年よりやや少ない状況です。果樹カメムシ類は、園外から飛来してくるため、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努めます。
		—	
		—	
		—	
カンキツ類	黒点病	やや少	黒点病は、感染源である樹冠内の枯れ枝除去に努めるとともに、薬剤散布後の積算降水量が250mmになると次の防除が必要です。 かいよう病は、台風による茎葉の損傷により発生が助長されるため、襲来前に予防散布をします。 ミカンハダニの発生が多くなっています。発生初期段階(寄生葉率30%、1葉当たり雌成虫数0.5～1頭)での防除がポイントです。
	かいよう病	やや少	
	ミカンハダニ※	多	
	チャノキイロアザミウマ	並	
茶	炭疽病	やや少	炭疽病は、秋芽の生育期に気温が高く、雨が多いと感染・まん延しやすいため、萌芽期から生育期を重点に1～2回の薬剤散布を行います。 カンザワハダニの発生が多くなっています。低密度のうちに防除を行うとともに系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。 チャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイは、萌芽から1～2葉期の被害を抑えることが重要ですが、秋芽は長く伸育し続けるため、萌芽期～1葉期及びその7～10日後の2回の薬剤散布を行います。
	もち病	並	
	輪斑病	並	
	チャノカクモンハダニ	並	
	チャハマキ	並	
	チャノホソガ	少	
	カンザワハダニ	やや多	
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	
	チャノキイロアザミウマ	並	
	クワシカガラムシ	少	

- 1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
- 2) ※は病害虫発生予察情報を発表中です。
- 3) 病害虫防除肥料検査センターのHPアドレスは、QRコードより閲覧してください。

